

# 近代化との対峙 — オリエントの世界とビセンテ・リスコー —

Andres PEREZ RIOBO

今こそヨーロッパに東洋の種をまくのに適切な時である。光の国々から真実が届かなくなることはないだろう。現在、仏教信者は、特にドイツとイギリスで増加している。ブラフマー信者と神智学者は活発に宣教を行っている。もしかすると、ショーペンハウアーが予言したインド・アーリア人の再生が近付いて来ている。東洋の言葉が聞こえてくる。耳を傾けてください<sup>1</sup>。

## 1. オリエンタリズムとガリシア

19世紀初頭から古代インドの文学・哲学・宗教に関する知識がヨーロッパで普及してきた。1784年にベンガル・アジア協会 [Asiatic Society of Bengal] の創設を出発点として植民地インドで始まった古典の研究と翻訳は、イギリス、フランス、ドイツを中心にロマン主義の波に乗り、思想・文学・芸術界に衝撃を与えた。このヨーロッパにおけるアジアへの憧れの風潮はサイドの有名な本の題名でもある「オリエンタリズム」<sup>2</sup>と呼ばれ、支配的な言説を形成してきた。一方、人文主義的な観点からヨーロッパの文化と思想に吹き込んだこの新風は「東洋のルネサンス」 [Oriental Renaissance] とも呼ばれる。この表現は19世紀初頭からオリエントに熱狂したロマン主義者の間で使われ、フランス人知識人エドガー・キネーの『宗教の神髄』(1842年)により普及された。当時オリエンタリストたちはサンスクリットとインド古典の発

『GR—同志社大学グローバル地域文化学会 紀要—』15・16, 2021, 103—123頁。  
同志社大学グローバル地域文化学会 ©Andres PEREZ RIOBO

見によって東洋がヨーロッパ文明へ新たな生気を与えることを期待していた<sup>3</sup>。「東洋のルネサンス」の影響はドイツのロマン主義者と哲学者（ヘルダー、シュレーゲル、ショーペンハウアー、ニーチェなど）の場合に特に目立つが、イギリス人やフランス人の学者の役割も大きく、19世紀を通じてこれらの国の文化界にオリエントの存在が浸透してきた。

一方、スペインは19世紀に政治的・社会的に不安定な状況が続き、産業化が進む西欧にかなり遅れ、文化的にも切り離されていく。スペインにおいて、オリエントの影響は1880年代から感じられるようになり、20世紀初頭に興ったモダニズムと融合し、1920年代まで流行が続いた。この時代にスペイン・ガリシアのビセンテ・リスコ [Vicente Risco] (1884–1862) がロマン主義、モダニズム、ドイツ哲学、神智学を源泉にしながら独特なオリエント像を創造した。その分析が本稿の目的である。

本稿ではオリエンタリズムに没頭していたリスコについて述べる上で、まず東洋と西洋との近代的関係の議論に影響を与え続けているサイドの『オリエンタリズム』に触れざるを得ない。サイドはフランスとイギリスで発展したオリエンタリズムという学問研究に関して、帝国主義の補足道具としての性格を強調し、オリエントに住む者たちの上に強制的に敷かれた支配の言説だと見なした。

サイドの少々狭いオリエンタリズム理解に最も反発したのは、もちろん東洋学者であった<sup>4</sup>。彼らはサイドの文献扱いに異議を唱えながら、彼の還元主義的なアプローチを、すなわち、彼が帝国主義の競争に参加したフランスとイギリスの東洋学者のみに注目し、オリエンタリズムの分析を中東の表象に限定したことを強く批判した。

また、サイドはヨーロッパ内におけるオリエンタリズムの役割の一面しか論じなかったことも非難された。確かに植民地化を正当化するために便宜上政治家に利用されたが、オリエンタリズムは同時に西洋文明を批判するための強力な武器だった<sup>5</sup>。ヴォルテールは18世紀にすでにカトリック教会と旧体制を攻撃するため、積極的に中国社会に言及していた。リスコを含め、以降の東洋学者の多くは実際植民地政策に反対し、被植民者への不公平を訴え、サイドが考えたほど西洋文明の優位性を前提にせず、前述の通り東洋

の知恵に学ぶべき姿勢を維持した。

リスコはオリエンタリストであったが、彼の場合、サイドのオリエンタリズム論の中核である知識と権力の連帯が見当たらない。スペインは19世紀を通じて東洋に関する海外政策をほとんど行わず、大学には東洋学科が存在せず、中世のアル・アンダルスを除いてそのような専門家がいなかった<sup>6</sup>。また、サイドのオリエンタリズム論は西ヨーロッパの列強と中東との関係に注目するが、ヨーロッパの片隅に位置し、近代化に追いつかないガリシアはむしろ世界経済の周辺に属していた。リスコは文化的に西洋人であったにも関わらず、彼のオリエント観はフランスとイギリスという帝国主義大国の学者とは違う。オリエンタリズム論では東洋だけが本質主義的にとらえられるだけではなく、西洋も一枚岩で不変的な性質があるかのように語られる傾向が強い。しかし、西洋におけるオリエンタリズムはサイドが論じたより多様な形をとった。従来の研究は、ヨーロッパ思想の中核にはなかった人物から見たオリエンタリズムを見逃した。リスコを通じてオリエンタリズム論に新たな視点がもたらされると思う。

ガリシアではリスコについてモノグラフ・伝記・研究論文が数多く出版されている<sup>7</sup>。そのほとんどは彼の政治思想と文学活動をテーマとするが、リスコの東洋趣味を部分的に取り上げる何本かの論文も執筆された<sup>8</sup>。ただ、これらの論文ではリスコのオリエンタリズムと西洋思想との関連性があまり論じられていないことと、個別の作品だけを取り上げているという欠点がある。本稿では以上の先行研究を踏まえながら、リスコのオリエンタリズムを全体的に検討し、西洋思想の流れに位置させ、そして彼の思想におけるオリエントの意義について議論する。

ピセンテ・リスコはガリシア民族主義運動の創立者の一人として有名である。彼の著書『ガリシアのナショナリズム論』（1920）はガリシア近代ナショナリズムのスタートを告げたとと言える<sup>9</sup>。その後、彼が推進した文芸雑誌『ノス』[Nós] は1936年までガリシア文学・歴史・民族学の近代的な基礎を築き、ガリシア思想の近代化を図った<sup>10</sup>。しかし、共産主義革命を恐れていた信仰の篤いリスコはスペイン人民戦争が勃発すると、保守的・ファシスト的なフランコ側に付き、民族主義的な運動を辞めた。それにも関わら

ず、戦後もガリシア語とガリシア文化の保護と普及に務め、文化人として高い評価を受け続けた。

リスコは民族主義的活躍が目立つが、若いうちから一生を通じて育んだオリエント学者としての一面はあまり注目されない。同世代のスペイン人知識人の中にリスコほどオリエントに関心を寄せた人は他にいない。ただ、ヨーロッパ列強のように帝国主義的な競争に参加せず、アジアに地政学的な利害を持っていないスペインにはリスコのような人物の存在自体が珍しかった。さらに、インド哲学を研究し、仏教を紹介し、ヨガをする人物が、社会的・経済的に近代化を果たさず、スペインの中で最も遅れていた農村地域であったガリシアに現れたのは異常の極致であった。確かに珍しい人物であるが、リスコはスペイン全体の後進性を実感したため、ガリシアの文化をヨーロッパの近代文化と結び付けるために人生を捧げた。そこで彼はヨーロッパ哲学と文学の中でオリエントに出会い、オリエンタリズムのフィルターを通してアジアの宗教と思想の知識を得た。興味深いことに、彼は専門的な教育を受けたことがなく、アジアへ行ったこともなく、故郷のオウレンセで全てを自学自習した。リスコは誰から影響を受け、どのようなアジア像を描き出し、そして何のためにそれを利用したか考察していきたい。

## 2. モダニズムと神智学

リスコはガリシア地方都市のオウレンセ出身、父は大蔵省の公務員で、ミドルクラスとして育った<sup>11</sup>。オウレンセには教授マルセロ・マシアスが主催したモニュメント委員会 [Comisión de Monumentos] における小さな文学サロンがあり、リスコを含む知識人が集い、近代文学と哲学の作品が広く読まれていた。ここで若いリスコはフランスの象徴主義、ドイツの観念論、ニーチェなどの読書にふける。

文学同人のプリミティボ・ロドリゲス・サンフルホはマドリードで大学に通い、休暇の度にオウレンセに戻っていた。20世紀初頭にマドリードの文化界はニカラグア詩人ダリオを代表にモダニズムが圧倒的な力を持っていた。

リスコは友人のプリミティボを通じてモダニズムとそれに付随するオカルト、精神主義、神智学、オリエンタリズムに触れるようになった。プリミティボはその後オカルトと神秘主義に関心を持ち続けるが、リスコは神智学を通じてインド哲学を真剣に学んでいく。

1880年から1920年までヨーロッパに興った「オカルト復活」[occult revival]<sup>12</sup>とロマン主義時代の「東洋のルネサンス」に続く「第二の東洋のルネサンス」[second Oriental Renaissance]<sup>13</sup>がモダニズムにとって重要な位置を占めた。モダニズムはベル・エポックの文化人による世界観であり、道徳が退廃した物質主義的な近代化に対する反発である。空疎な現実に対し、モダニズムに影響された19世紀末の文学・芸術界は啓蒙主義・ルネサンス・古典主義から受け継いだものを否定し、より精神的な要素を伝統・中世・オリエントから探索しはじめる。前述の通り、スペインには学問的なオリエンタリズムはほとんど皆無だったが、先行研究が示すように、モダニズム的な文学と芸術にその影響は大きかった<sup>14</sup>。

リスコはモダニズムの文化人と同様に近代西洋の衰退を確信していた。このため、神智学とオリエント哲学からヨーロッパ的近代の代案を考えるようになる。神智学は西洋と東洋の知識の統合を推進し、普遍主義的な宗教を創造することを目標とする信仰体系である。神智学協会 [Theosophical Society] は1875年にヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー によって創立され、大規模な出版活動と各国の支部を通じて間もなく広く普及され、欧米とインドの知識人と芸術家の間で人気となった。例えば、発明家のエジソン、画家のモンドリアンとカンディンスキー、そして作家のハクスリー、エリオットやイエーツなどが神智学協会と深く関わった人物であった<sup>15</sup>。

スペインでは1893年に神智学協会の支部が創設され、1911年にガリシアのポンテベドラ市に「マルクス・アウレリウス団」[Grupo Marco Aurelio] という小さな神智学団体ができた<sup>16</sup>。スペイン支部は主に雑誌『ソフィア』[Sophia] (1893-1914) と出版社ビブリオテカ・オリエンタリスタ [Biblioteca Orientalista] を通じて文化的活動を行なった。ここでブラヴァツキー・オロコット・ベサントという神智学協会のリーダーの著書だけではなく、オリエント・神秘思想・精神主義に関心を持ったラスキン、トルストイ、カーライ

ル、エマソンのような西洋人作家、ヴィヴェーカーナンダのようなインド思想家の著書、『バガヴァッド・ギーター』のようなインド古典のスペイン語版も版行されていく。

友人のプリミティボはリスコにマドリードの有名な神智学者マリオ・ロソ・デ・ルーナを紹介し、リスコもポンテベドラの上記団体の神智学者たちとの交流を始める<sup>17</sup>。1910年に地方新聞『エル・ミニョ』[El Miño]に文化記事を書くようになったリスコは「ラフ・サヒブ」というインド風ペンネームを使い、インド古典の『マハーバーラタ』とカーリダーサの『シャクンタラー』を部分的に翻訳する。また、1912年に神智学のスペイン支部の雑誌『ソフィア』に「個性の異端について」という論文を掲載する<sup>18</sup>。ここで神智学的な観点から、無我説を説明しつつ仏教における魂の概念と近代心理学が提示する精神の定義の融合を試み、仏教への強い関心を示す。20年後「我ら、不適応者」という記事で、アジアへ憧れていた当時を回顧している。

我々は異国趣味で、遠い昔の、離れた、未知の世界の信奉者であった。我々の夢は機械を知らず、男性がシルクハットを被っていない地域へと向かっていた。ほとんど世界に知られていないインド、中央アフリカ、神秘的なチベットの奥地へ、あるいは古代のエジプトやバビロニアへ……私自身はインドの宗教、六つの正統なダルサナ、シッダルタとマハーヴィーラの外れた体系、ローカーヤタ派・シャクティ派・タギー派の呪われた哲学を研究し、サンスクリットの語形変化と活用を学び、デーバナーガリー文字を読むようになった<sup>19</sup>。

オリエントに魅了されていたリスコは1913年から1916年までマドリードで高等教員養成課程 [Escuela Superior de Magisterio] に入学する。教授の一人は哲学者のオルテガ・イ・ガセットであった他に、リスコはマドリードの文学サロンとカフェを頻繁に訪れ、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ、ギジェルモ・デ・トーレ やラファエル・カンシノス・アセススなどの文化人に仲間入りをする<sup>20</sup>。マドリードでオリエンタリストとしての活動を続け、1913年にノーベル文学賞を受賞したタゴールをスペインに紹介する最初の講演会

を開き<sup>21</sup>、マドリードで「タゴール」という愛称で呼ばれるほどインドに夢中になっていた。

この講演会の中でリスコはタゴールを優れた天才と称賛し、インドにおける人間と自然との融和、精神界の豊さ、伝統的文化の擁護という点について、西洋人が学ぶべきだと主張した。リスコはイーヴリン・アンダーヒルのベストセラー『神秘主義』（1911年）からタゴールを知るようになり、ガリシアの文化雑誌にタゴールの短編と詩をスペイン語とガリシア語に翻訳し掲載し、その後もインド哲学とナショナリズムについて書き続けた。

オウレンセに戻ったリスコの神智学への関心は文化誌『ラ・センテュリア』[La centuria]（1917-1918）の創刊として結晶した。「新智学雑誌」[Revista neosófica] という副題を持ち、表紙からオリエンタリズム的な性格が明らかだった。この雑誌にはガリシア知識人の寄稿記事と共に、ランボー、マラルメ、フールモンのようなフランスの象徴主義者、ペラダン・ルトスワフスキのようにオカルトと神秘主義と関係ある作家、チェスタートンとタゴールについての研究記事が掲載された。

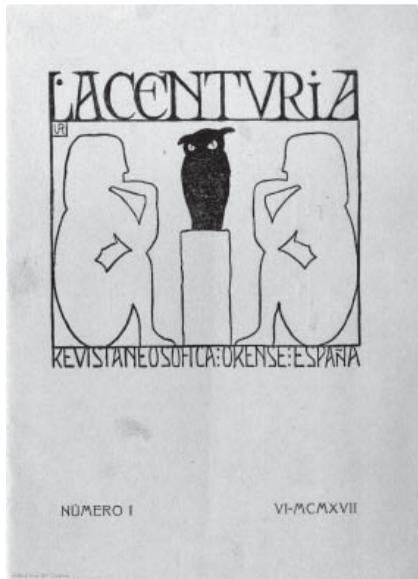


図1 「ラ・センテュリア」第1号の表紙。

7回に渡ってリスコは「未来全美学の序章」という芸術批評論を執筆する<sup>22</sup>。ここにブッダが説いた四諦を紹介し、この世にある全てのものは実在するのではなく、感覚上の世界に過ぎない、という仏教の原則を基礎にし、自分の美学論を展開する。さらに、ニーチェとベルクソンをヨーロッパにおける東洋哲学の解釈者と位置付け、東洋と西洋の価値観の融合を目指した。リスコは、ギリシア・ローマを起源とするヨーロッパ芸術はもう消耗しきっており魅力を失ったと述べ、東洋美学の革命力への期待を示した。これに関して、自分に起こった出来事として、「以前壁に日本の仏を描いた。そして、その部屋にあったビーナスの小さい彫像は数日後不思議と粉々に割れてしまった」と語る<sup>23</sup>。

リスコはその後オリエンタリズムと神智学に関心を持ち続ける。1919年に出版された神智学的な短編と言える『アルペイロス先生に起こった事件』<sup>24</sup>は教祖ブラヴァツキーの著書『パールをとったイシス』の影響を強く受けている。1923年には神智学協会の歴史を辿り、神智学から人智学 [Anthroposophie] を発展したルドルフ・シュタイナーについて連載記事を書いた<sup>25</sup>。

しかし、1920年代に世界的に人気を失い始めていた神智学に対し、当時より熱狂的なカトリック信者になっていたリスコは懐疑的になった。そして、民族学を研究するために1930年に行ったドイツへの海外研修を記録した『中央ヨーロッパ』(1934年)の中で、神智学の虚偽を訴えた<sup>26</sup>。さらにベルリンでは、若い頃憧れの存在であったタゴールの講演会に参加する機会があった。残念ながら、リスコはタゴールがオリエンタリズムに染められ、非常に不誠実な性格を持つと思うようになり、彼のインド知識人としての外見はポーズに過ぎないと失望した<sup>27</sup>。ただ、これはリスコが東洋に関心を無くしたという意味ではない。晩年までアジアの歴史と哲学について書き続け、以下に説明するように日常生活にまで東洋的な思考と行動とを取り入れた。

### 3. 西洋の危機と東洋の役割

西洋文化はアジアの諸文化・先行文化の塊に寄生的に重なり、貼り付いている。オークに巻きつくツタだ<sup>28</sup>。

オスヴァルト・シュペングラーは1918年に『西洋の没落』の第一巻を刊行した。同じごろリスコも西洋の衰退についての著書を準備していたが、シュペングラーの本の存在に気づき、自分の作品の出版を諦めた。その写本が1990年に『西洋の闇』という題名で出版された<sup>29</sup>。ニーチェとショーペンハウアーに影響を受けていたヨーロッパの思想家の大半は19世紀末から西洋文明に対してベシミズムを抱いていた。そして、第一次世界大戦で彼らの悪夢が現実となったといえる。

以前からモダニズムは近代化の様々な欠点—産業化・物質主義・社会の標準化・世界の西洋化・ブルジョアの価値観・実証主義—を乗り越えようとしていた。モダニズム美学の特徴は、オリエンタリズム的な要素を含むエキゾチックな趣味であり、それは、東洋の文明を武器として現実を批判できるからである。モダニストたちにとって東洋では西洋より人々が自由で純粹であるとし、昇華されたオリエント像を通じて近代ヨーロッパの機械化・階級闘争・功利主義などを否定した<sup>30</sup>。

自分の生まれ育ったヨーロッパへの不満や現実逃避が、ボヘミアンやダンディズムとして表現された。リスコも青年時代にオウレンセのダンディそのものであったが、軽薄なエキゾチシズムに止まらず、東洋の研究を通じて西洋への論理的な批判を展開した。

リスコのオリエント像は数多い記事の他に『西洋の闇』、『中央ヨーロッパ』（1934年）と『分かりやすいオリエント史』<sup>31</sup>（1955年）の三冊から窺うことができる。また、ヒンドゥー教を分析する600ページに及ぶ写本がリスコ財団 [Fundación Vicente Risco]（アジャリス市、スペイン）に保管されている。

『西洋の闇』は西洋文明への真正面からの攻撃である。リスコは危機を乗り越えるために東洋の知恵から学ぶべきだと訴える。しかし、ギリシア・ローマ文明の遺産のために、オリエンタリストたちが行っているアジアの過去に関する発見を活用しきれておらず、それらの文化の真の理解に及ぶことができない。彼にとって西洋文明の発祥の地はアジアにあり、ヨーロッパ文化の頂点であるキリスト教とカトリック教会はオリエントの産物であると断言する<sup>32</sup>。物質的にヨーロッパの方が発展していることは明らかであるが、精神的・倫理的な面で東洋の方が優れているとリスコは認める。例えば、仏教的な慈悲は全ての生物に向けられているため、人間だけに制限されているキリスト教的な博愛より優れているという<sup>33</sup>。

リスコの独創性は当時流行していたヨーロッパ中心主義から離脱した発想だったといえる。彼は帝国主義に正面から反対し、文明化を口実に過剰生産という問題を解決するための侵略戦争を行う列強を絶えず批判する。植民地の拡大は不道徳で不正な犯罪であるというだけではなく、植民地化された国々への悪しき西洋文明の輸出と、そこに存在していた賢明な民族への破壊という二つの害をもたらす<sup>34</sup>。そして、リスコは「進歩」という概念を信じず、ヘーゲルの史観を拒否し、東洋が「遅れている」という歴史認識をナンセンスだと言い切る<sup>35</sup>。このため、アジアの国々が近代化・西洋化することは大間違いだと考える。イエズス会が日本に輸出しようとしていたキリスト教と西洋文明を豊臣秀吉が抑圧したのは正しい判断だと主張する<sup>36</sup>。しかし、当時（1910年代後半）日本人は大砲を購入し侵略戦争をするヨーロッパ人並みの「文明人」になった。また、中国も文人が虐殺者にとって代わらない限り、国際社会の一員として認められないだろうと皮肉にも述べる<sup>37</sup>。『西洋の闇』を読むと、「闇」がアジアに広がっており、止めることができないという印象を与えられる。

30年以上後に、リスコは『分かりやすいオリエント史』でこれらのテーマを再び取り上げた。ヨーロッパは実証主義が出現する19世紀半ばまで、オリエントを称賛していたが、それ以降帝国主義の発展とともに、軽蔑または危機感（黄禍論）の対象となった<sup>38</sup>。「東は東、西は西、両者は決して会うことはないだろう」というキップリングの言葉が帝国主義時代における東洋へ

の理解を表している。しかし、リスコはイエス・キリストを「東洋人」として認識し、そしてヨーロッパの芸術と政治体制はアジアに由来すると述べ、多くの人が考えるように東洋を悪の原因とすることには批判的なのである<sup>39</sup>。

リスコの脱ヨーロッパ中心主義的なオリエント理解は解放主義的で、当時かなり進んでいたといえる一方、日本からエジプトまで、彼のオリエンタリズム的な「東洋」理論にヨーロッパ人としての偏見が見られる。彼は東洋を「イスラム世界」・「インド世界」・「中国世界」という三つの「世界文化」[mundos culturales] に分類したにも関わらず、それらの文明の間に西洋文明にはない共通点があったと考えた。それらはまず、何世紀にもわたる安定性である。東洋の社会では時間が経過しておらず、信仰・伝統・社会制度が昔と同様であるように見え、衣服・趣味・芸術・文学などに影響を与える「流行」は東洋には存在しないと述べる。そして、アジアの諸社会の特徴は伝統と文化の一体性である。宗教・知識・社会制度・習慣の全てが伝統に包摂されているため、西洋より一貫性を持った文明であると考えた<sup>40</sup>。

リスコはあらゆる面で保守主義者であったため、彼にとってアジアの不変性と伝統主義は欠点ではなく、ヨーロッパが危機を乗り越えるために採用すべき長所だと考えた。しかしながら、彼一人だけがこのように考えていたわけではない。両大戦間からユングとエリアーデは比較宗教学を創始し、カイザーリングは東洋と西洋の統合を実現するために「知恵の学園」[Schule der Weisheit] を開き、異なる宗教・文化との対話が進められていた。晩年のリスコは彼らの著書を熱心に読み、彼らに従って「東洋と西洋はお互いに理解し、完成しなければならない。なぜなら、東洋と西洋の精神を統合した場合のみ、誠実で完璧な人間が造られるからだ」と述べる<sup>41</sup>。リスコは文化間対話に非常に賛成していたが、東洋人が西洋化してしまったため、この対話に阻害が生じたと考えた。

リスコが感嘆していたアジアは近代化の影響で「脱東洋化」という形で見える速さで衰退していた。ヨーロッパがもたらした進歩主義、功利主義、反宗教主義のため東洋の「伝統」が破壊されつつあり、共産主義はその結末であるとみなし、最終的には脱植民地化の過程において正当な報復としてヨーロッパが攻撃されるだろうと予想する<sup>42</sup>。インドでイギリスの文化を

採用したバブー、そして近代化を促したネルーはリスクの批判を受けるが、最も非難されるのは中国である。政治的に社会主義に反対していたリスクはヨーロッパを代表する政治理論のマルクス主義を取り入れた中国人はもはや中国人ではなく、精神的に侵略者になっていると断言する。共産主義中国は西欧に対する脅威であるだけではなく、東洋の伝統を滅亡の危険にさらすと考えた<sup>43</sup>。

一方、リスクは日本が物質的には西洋化したが、ある程度伝統と日本的な心を維持できたと考えた。さらに、自分の政治理念に従って日中戦争をアジアにおける共産主義の普及に対する戦いと解釈し、大東亜共栄圏を高く評価した<sup>44</sup>。伝統に基づいてインドの魂を維持しようとしたガンジーの対イギリス脱植民地化運動もリスクの称賛を受けた。これらの例外にも関わらず、リスクが学んだロマン主義的な東洋像は第二次世界大戦後になくなりつつあった。ショーペンハウアーとニーチェの愛好者だったリスクは彼らと同様に悲観主義的な世界観を持ち、西洋と共に東洋も不可逆的に衰退していくと考えた。彼にとって西洋化を伴うグローバリゼーションは決して良いことではなかった。

#### 4. 東洋の存在とリスクの生涯

リスクは研究や評論の中だけでオリेंटを扱ったわけではない。その他にも、麻雀をしたり、俳句を詠んだり、『忠臣蔵』や『地獄門』を楽しんだりしていたが、それらは単なる趣味にとどまるものではなかった。彼にとってオリेंटは学問的な研究の対象というより、ヨーロッパの歴史を変えることもできる存在であり、そして人の精神を豊かにする知識源でもあった。彼は若い頃、当時流行していたオリेंट的なものに憧れ、東洋風の布を纏ったり、大麻を吸ったり、日本と中国をイメージとした舞台装置を作ったりして、地元のオウレンセで珍しい人物として知られていた<sup>45</sup>。表面的な側面もあったが、その後神智学を通じてヒンドゥー教と仏教の勉強に真面目に取り組み、そして道教にまでその関心を広げた。一生を通して執筆したヒン

ドゥー教に関する研究については既述したが、仏教についても深く考察し続けた。ただ、青年時代と違い、中年のリスコはその興味を他人とあまり共有せず、サンスクリットとヒンドゥー教を学んでいたことを周囲に秘密にしていた。人民戦争後の地方都市オウレンセは過激なキリスト教思想とスペインナショナリズムに満ち、この偏狭な世界で正統から外れた思想を持つ者として目立ちたくなかったのだろう。

ところが、プライベートでは「自分はカトリック教徒でなければ、仏教徒になる」と息子アントン・リスコによく語っていた<sup>46</sup>。実際、彼は常にカトリックの教義を守り、キリスト教的世界観を完全に受け入れ、キリスト教の救済論に対して疑問を抱いたことがなかった。矛盾に見えるが、リスコは東洋哲学にキリスト教の厳しい教義に見つけられない精神的な自由を求め、バランスを取ろうとしていた。例えば、彼は瞑想を実施し、ヨガを「精神的改善の素晴らしい手段」と位置づけ<sup>47</sup>、そのヨーロッパへの輸出は神智学の最高の成果だと評価した<sup>48</sup>。息子アントンによると、父は一回意識を失い、悟りに近い状態に至ったと伝えられている<sup>49</sup>。

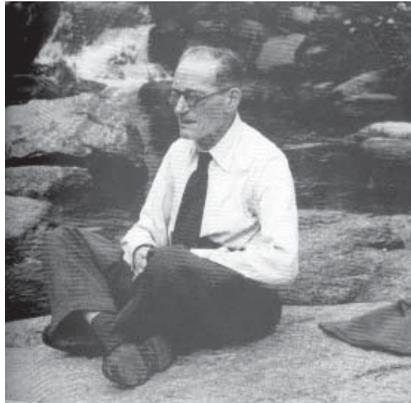


図2 河畔で瞑想をするビセンテ・リスコ。  
(Fundación Vicente Risco)

リスコの関心の的は実際のアジアより理想化された「オリエント」であったが、帝国主義と脱植民地化に敏感であり、そのためガンジーを非常に高く評価していた。ガンジーは他の第三世界のリーダーと違い、海外思想と近代

化に頼らずイギリス帝国に対してインドの伝統を利用し対抗しようとした。これは、伝統を用いつつ新しく独特なガリシア像を創造しようとしたリスコの野心と一致し、彼に同感した。自分をガンジーと比較するほど気に入っていた。

オウレンセの新聞で私がガンジーの服を着た風刺画が掲載された。見事だと思う。私はここ [ガリシア] で、もちろん私なりのやり方で、とても地味で淡白ではあるが、ガンジーがインドで表現してきた非常に重要な役割を演じることができたし、今でも表現できると思う。すなわち、伝統的生活様式、郷土への愛着、その郷土と調和した暮らしである<sup>50</sup>。

リスコは西洋の産業化と都市化とは対照的に、東洋全体において人々は自然に近い暮らしを送っていると考え、それを再生しようとした。また、ウパニシャッドの影響を受け、ガリシアの自然と郷土に対して汎神論的な感情を抱き、昔ながらの田舎暮らしの物語を神秘的に描いた<sup>51</sup>。時々別荘で裸になり、外で自然と親密な繋がりを求める体操も行っていた<sup>52</sup>。ガリシアの自然の美しさを絶賛し謳うことは19世紀のロマン主義者に遡るが、リスコはその上、ごく小さな自然について詳細に描写し、オリエンタ的な感受性を見せた。例えば、机の足から降りるカタツムリや果樹の花などについても短編を書いた<sup>53</sup>。

一方、過去と伝統を知るために、そして自然との一体感を感じるためにリスコは郷土をよく歩き回っていた。これも東洋思想と結びつけ、中国における徒歩の旅の意義によく言及した。ガンジーが弟子たちに一年のうち三ヶ月間インドを歩かせることに賛同し、ガリシア人たちにそれを強く薦めた<sup>54</sup>。

リスコは道教にもかなり影響を受けた。老子の『道徳経』をじっくり味わい<sup>55</sup>、自然に近い生活をするを試みた。晩年の自伝風の記事の中に今後の目標について、「老子は私に計画を持たないことを教えてくれた。もう計画を持つ年齢ではないことは事実だが。私の大なる望みは平穏な生活を送

ることだ」と語っている<sup>56</sup>。「道」を見失わないように目的を持たないという道教の教えを、ガリシアナシオナリズム理論に適用し、ナシオナリズム運動が社会的目的を創造するのではなく、社会の中から模索すべきだと「中国人から理性の哲学者と呼ばれる」老子に従って断言した<sup>57</sup>。

リスコはオリエントを愛していたが、実はアジアに足を踏み入れたことがない。彼は1914～1917年にマドリードで大学に通い、そして1945～1949年に再びマドリードで文学界での成功を試みたが、それ以外ずっとオウレンセに住んでいた。隣国ポルトガルへの訪問を除いて、唯一の海外経験は1930年に中央ヨーロッパで過ごした4ヶ月だった。ベルリン大学のリチャード・トゥルンワルト教授の下で民族学を勉強するためにスペインの学術振興会 [Junta para ampliación de estudios] により派遣され、パリ経由でドイツに入国した。しかし、トゥルンワルト教授は東アフリカでフィールドワークをしており不在だったため、ウィーンとプラハまで旅行を続けた。この混乱期のドイツでリスコは西洋文明が直面している危機を確認し、深い印象を受けた。

一方、この旅は西洋文明の中心への旅と共に、オリエントへの旅でもあった。なぜならば、ドイツとフランスがオリエンタリズムの研究を長い間リードし、両国の博物館にはアジア美術の充実したコレクションの数々があり、スペインより日常生活においてもその影響が大きかった。リスコはこの短期間にオリエントに染まり、オウレンセで経験できなかったことをしようとした。パリで神智学の講演に行き、『バガヴァッド・ギーター』を購入し、前衛派と東洋美術を扱う書店「パヴォロスキー」に圧倒された。ベルリンで中華料理を食べ、オカルトの専門店に入り、日本と中国の雑貨店が集まるシャルロテンブルク町を散策し、ドイツ人教授が建てた仏教寺院を訪れた。

先述したようにタゴールの講演を聴いたが、ベルリンでの博物館の見学も重要な経験であった。武器博物館で日本刀を含む東洋の武器を鑑賞し、アルテス・ムゼウムでエジプト美術の展示を見る機会を享受した。しかし、最も印象的だったのは民族学博物館だった。朝から午後3時まで滞在し、何度も訪れ、「ヨーロッパを去らずにアジアにいたいと思っていた」と述べた<sup>58</sup>。インド・中国・日本などの美術を味わい、客を迎える日本の阿弥陀仏像の前で瞑想した。しかし、リスコは学問や美術品より目に見えない体験と精神の

方に夢中だったため、美術品があまりにも多いことに疑問を抱いた。オリエンタリストたちはただ物を収集するために探検に行ったのか、それともその美術を創造した精神から何か学ぼうとしていたのか。そして、ドイツ人の研究者は本当に仏教など他のアジア宗教を体験できたことがあるだろうか。結局、疑問を残したまま膨大な展示物を消化できなかった。「東洋からの侵略だ」を言いながら、鑑賞した美術品について記録することを諦めた<sup>59</sup>。

ドイツでリスコはドイツ人が仏教とヒンドゥー教に魅せられ、神智学とオカルトが人気であることを確認したが、オリエントに関する新たな理解は得なかった。むしろ、彼は西洋文明が神を失ったため、人々が心の虚しさを埋めるように、または近代文明を否定するように東洋を利用していると感じた。これは何もしないよりははまだ穏当であるが、衰退からの脱出の道はそれぞれの伝統にあると結論する<sup>60</sup>。

## 5. リスコの視点

### —脱ヨーロッパ中心主義的なオリエンタリズム—

リスコが把握していたオリエントは、サイドが指摘したようにヨーロッパ人が創造したアイディアで、支配性と強制性に満ちたステレオタイプだった。日本からエジプトに及ぶ彼のオリエント像の理解は典型的な19世紀のオリエンタリズムの見方である。また、リスコは近代化を図りたいアジアの国々に対して否定的であり、歴史に凍結された社会こそがオリエントの実像であると考えた。このため、西洋化を代表する国民国家とナショナリズムの出現は大間違いで、トルコのアタチュルク・中国の孫文・日本の伊藤などは自国の伝統文化を消滅させていると述べる<sup>61</sup>。実際、ガリシアに暮らし続けた彼は、オリエンタリズムに学ぶ以外に東洋に関する知識を得る手段がなかった。

一方で、リスコは「西洋人」であっても西洋の中心から疎外された周辺に生まれ、しかも近代の西洋文明を全面的に拒絶していた。サイドが目していた研究対象への優越感を持っていたイギリス・フランスを代表する東洋

学者たちと違い、彼は帝国主義に反対した。確かに、非常にオリエンタリズム的な眼差しを持っていたが、西洋において精神の消失を招いた失敗がアジアで再び起こらないように警戒していた。

以上に見たように、リスコはまず東洋を西洋を批判する武器として使い、そして西洋の精神に新風を吹き込むためにアジアの諸哲学の研究に取りかかった。ただ、彼はカトリックの熱心な信者であったため相容れない思想の間で悩み、無条件にオリエントの夢に飛び込むことができなかった。しかし、キリスト教の普遍主義的な価値を前提に、東洋と西洋の思想の統合を図ろうとしていた<sup>62</sup>。イエス・キリストは西洋人だけを救いにきたわけではないと述べ、キリスト教を西洋文化から切り離し、またその関係の偶然性を主張した。宣教師は西洋文化とキリスト教を一致させる傾向があるが、キリスト教は普遍主義的であり帝国主義的ではなく、世界文化のいずれも、ありのままにカトリック教になることができる。ローマ・ギリシアの古典文化を部分的に取り入れたように、カトリック教会は孔子、老子、ブッダ、シャンカラの教えも採用すべきだと指摘した。

リスコの観点は時代の流れに逆行していたように見える。20世紀を通じて、西洋・東洋を問わず、宗教の重要性と伝統社会が徐々に失われていった。その悲劇に対して警告を発したリスコの言葉は、グローバリゼーション（彼は「世界主義化」[mundialismo]と名付けた）に潜む危険性を我々に再認識させるのである。

今のところ、世界主義化は欧米の産業化による地球上全人類の侵略の中に集約されている。西洋民族は全ての人々を自分たちの不幸に巻き込みたいのである。本当に存在する唯一の世界主義化とは、すべての土着文化を殺し、大産業世界の灰色で画一的で人工的に機械化された、不快な悲しみを標準化している、あの帝国主義なのである<sup>63</sup>。

## 注

- 1 1910年頃のピセンテ・リスコの新聞記事。Rodríguez González, Olivia, *Estética e teoría da cultura en Vicente Risco*. Vigo: Galaxia, 2001, p.65.
- 2 Said, Edward, *Orientalism*. New York: Vintage Books, 1979.
- 3 「東洋のルネサンス」について以下を参照。Schwab, Raymond, *The Oriental Renaissance. Europe's Rediscovery of India and the East. 1680-1880*. New York: Columbia University Press, 1984.
- 4 その中でバーナード・ルイスとロバート・アーウィンから特に辛辣な批評を受けた。以下を参照。Lewis, Bernard, "The Question of Orientalism". *New York Review of Books* (June 24, 1982); Irwin, Robert, *For Lust of Knowing. The Orientalists and their Enemies*. London: Allen Lane, 2006.
- 5 このような批評について以下を参照。Clarke, J.J., *Oriental Enlightenment. The encounter between Asian and Western thought*. London and New York: Routledge, 1997.
- 6 López García, Bernabé, "Los arabistas españoles 'extramuros' del orientalismo europeo (1820-1936)." *Revista de Estudios Internacionales Mediterráneos* 21 (2016).
- 7 リスコの思想と生涯を取り上げる主要著書については、以下を参照。Lugris, Ramón, *Vicente Risco na cultura galega*. Vigo: Galaxia, 1962; Casares, Carlos, *Vicente Risco*. Vigo: Galaxia, 1981; Beramendi, Justo G., *Vicente Risco no nacionalismo galego*. Santiago: Edicións do Cerne, 1981; De Juana, Jesús, *Aproximación al pensamiento e ideología de Vicente Risco (1884-1963)*. Ourense: Deputación Provincial de Ourense, 1984; *Estética e teoría da cultura en Vicente Risco*, op. cit.
- 8 Risco, Antón, "Vicente Risco e os orientes". *Vicente Risco. Arredor de Nós*. Promocións Culturais Galegas, 1993, pp.27-32; Rodríguez Fer, Claudio, "Bailando con Thotankhamon. Risco e o exotismo modernista". *Vicente Risco. Arredor de Nós*, op. cit., pp.58-64; González Fernández, Ángel, "Orientalismo y civilización en el pensamiento de Vicente Risco", pp.115-128. *Galicia y Japón: del sol naciente al sol poniente. IX Encontros internacionais de filosofía no Camiño de Santiago*, Universidade da Coruña, 2008; Rivera Vázquez, Iria-Friné, "O orientalista Vicente Risco". *Praza Pública*, 19 de abril de 2015.
- 9 Risco, Vicente, *Teoría do nacionalismo galego*. Ourense: La Región, 1920.
- 10 雑誌 *Nós* (私たち) は1920年に発行し、1936年の144刊号まで刊行された。
- 11 リスコの伝記について以下を参照。Casares, op. cit.
- 12 Wilson, Leigh, *Modernism and Magic. Experiments with Spiritualism, Theosophy and the Occult*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013, p.1.
- 13 Bramble, John, *Modernism and the Occult*. Houndmills: Palgrave Macmillan, 2015, p.20.
- 14 Litvak, Lily, *El sendero del tigre. Exotismo en la literatura española de finales del siglo XIX*

- (1880-1913). Madrid: Taurus, 1986
- 15 神智学協会の歴史について以下を参照。Hamme, Olav and Rothstein, Mikael (ed.), *Handbook of the Theosophical Current*. Leiden, Boston: Brill, 2013.
  - 16 スペインにおける神智学について以下を参照。Pomés Vives, Jordi, “Diálogo Oriente-Occidente en la España de finales del siglo XIX. El primer teosofismo español (1888-1906): un movimiento heterodoxo bien integrado en los movimientos sociales de su época.” *Revista HMiC, història moderna i contemporània* 4 (2006): pp.55-74.
  - 17 Otero Pedrayo, Ramón, “Lembranza do mestre Vicente Risco.” *Boletín de la Real Academia Gallega* 29 (1969): pp.266-270.
  - 18 Risco, Vicente, “Ensayo sobre la herejía de la individualidad.” *Sophia Revista teosófica*, 1 (1912): pp.32-39.
  - 19 Risco, Vicente, “Nós, os inadaptados.” *Nós* 115, 7 (1933): pp.115-123.
  - 20 Casares, op. cit., p.42.
  - 21 講演会の筆記を以下に参照。“Rabindranath Tagore (Premio Nobel de Literatura) por D. Vicente Risco. Conferencias en el Ateneo de Madrid.” *Revista La Palabra* 17-18, 9 (1913).
  - 22 Risco, Vicente, “Preludio a toda estética futura.” *La centuria* 1-7, (1917-1918).
  - 23 *Ibid.*, 7 (1918): p.19.
  - 24 Risco, Vicente, *Do caso que ll'aconteceu õ Dr. Alveiros*. A Cruña: ¡Terra a nosa!, El Noroeste, 1919.
  - 25 Risco, Vicente, “O teósofo alemán Rudolf Steiner”. *Nós* 15, 17, 18, (1923)
  - 26 Risco, Vicente, *Mitteleuropa*. Santiago: Nós, 1934, pp.307-312.
  - 27 *Ibid.* pp.169-173.
  - 28 *Ibid.* pp.260.
  - 29 Risco, Vicente, *Las tinieblas de Occidente*. Edición de Manuel Outeiriño. Santiago de Compostela: Outelo Blanco, 1990
  - 30 *El sendero del tigre*, op. cit., pp.16-17.
  - 31 Risco, Vicente, *La historia de Oriente contada con sencillez*. Cádiz: Escelicer, 1955.
  - 32 *Las tinieblas de Occidente*, op. cit., pp.59-61.
  - 33 *Ibid.* p.61.
  - 34 *Ibid.* pp.118-119.
  - 35 *Ibid.* p.167.
  - 36 同じ理由のため、「鎖国」対策も高く評価した。 *La historia de Oriente contada con sencillez*, op. cit., p.242.
  - 37 *Las tinieblas de Occidente*, op. cit., pp.208-209.
  - 38 *La historia de Oriente contada con sencillez*, op. cit., pp.7-9.
  - 39 *Ibid.* p.85.
  - 40 *Ibid.* pp.10-12.

- 41 Ibid. p.9.
- 42 Ibid. p.207-208.
- 43 Ibid. p.221, 289.
- 44 Ibid. p.245-247, 287.
- 45 Casares, op. cit., pp.21-22.
- 46 Risco, Antón, *Risco segundo Risco*. En *Para ler a Vicente Risco*. Vigo: Galaxia, 1997, p.129.
- 47 *La historia de Oriente contada con sencillez*, op. cit., p.118.
- 48 “O teósofo alemán Rudolf Steiner”, op. cit., 18, (1923): p.15.
- 49 *Risco segundo Risco*, op. cit., p.159.
- 50 Risco, Vicente, *Libro de las horas*. Allariz: Fundación Vicente Risco, 2011 (discurso al final de la obra).
- 51 Risco, Vicente, *A coutada*. A Cruña: Lar, 1926. 以下の記事も参照。“La vida del campo”, “Lo rústico”, *Libro de las horas*, op. cit., pp.110-116.
- 52 *Risco segundo Risco*, op. cit., p.191.
- 53 Risco, Vicente, “Memorias de pouco tempo”, *Leria. Galaxia*, 1961, pp.147-154. “Floreecen los frutales”, *Libro de las horas*, op. cit., pp.107-110.
- 54 Risco, Vicente, “As viaxes de a pé”, *Leria*, op. cit., p.163.
- 55 “Vicente Risco e os Orientes”, op. cit. p.32.
- 56 Risco, Vicente, “Autobiografía confidencial”. Reproducida en *Grial* 86 (1984): pp.515-516.
- 57 Risco, Vicente, “Busquemos un fin”. *La Zarpa*, 8 de abril de 1922.
- 58 *Mitteleuropa*, op. cit., p.190.
- 59 Ibid., p.201.
- 60 Ibid., pp.312-313.
- 61 Risco, Vicente, “Formas modernas de nacionalismo”, en Casares, op. cit., pp.160-69.
- 62 Risco, Vicente, “Catolicismo e latinismo”. *Logos* 23, 11 (1932): pp.161-166.
- 63 *Mitteleuropa*, op. cit., p.289.

Abstract

## Confronting Modernization: Vicente Risco's Oriental World

Andres PEREZ RIOBO

Historian, anthropologist, and essayist, Vicente Risco (1884-1963) was one of the most prominent thinkers of Galician nationalism in the first half of the 20th century. Furthermore, his interest in finding an alternative to a Western modernity that he perceived as decadent led him to become interested in the Orient, as an endless source of knowledge, despite the fact he never set foot in Asia. He taught himself varied subjects as hieroglyphic writing, Devanagari script, Sanskrit, and the religions of India, as well as the art and literature of China and Japan. He introduced the meditative practices of Buddhism to other Galician intellectuals and gave lectures on the work of Rabindranath Tagore. During the 1930s he traveled to Germany where he indirectly came into contact with the Asian world through his visits to the great museums that kept collections of oriental art. In 1955, he published a historical synthesis about Asia, extraordinary among other things because in post-war Spain it was difficult to find works that address this matter. In this paper, I introduce the life and career of Risco focusing on his work as an orientalist and his place in the ongoing debate on East-West cultural relations inaugurated by Edward Said's *Orientalism*.